

体験
しょう

発見
しょう

制作
しょう

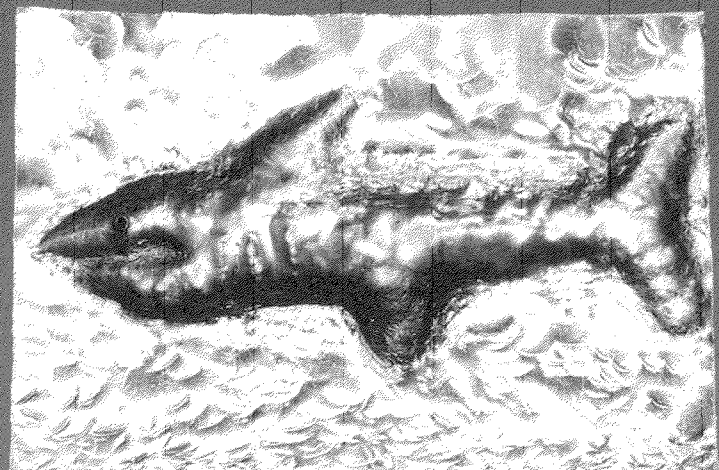
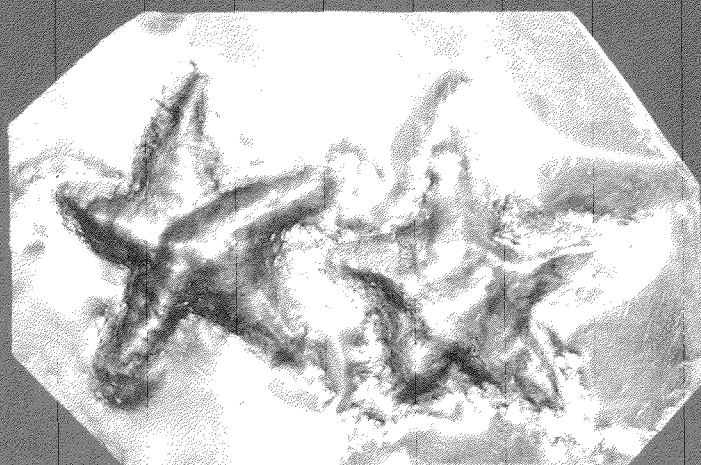
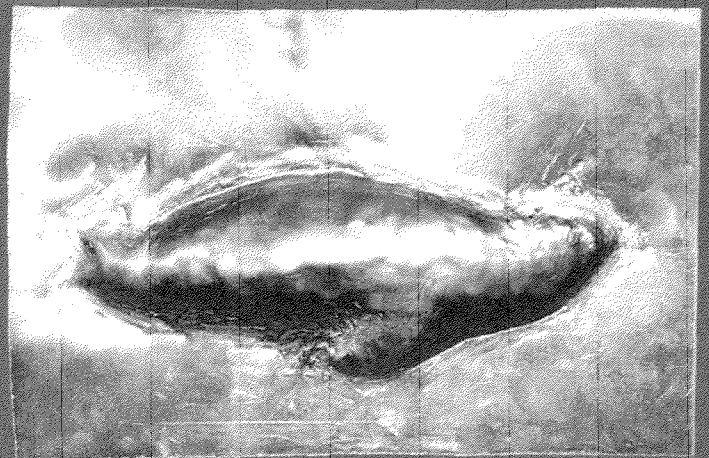
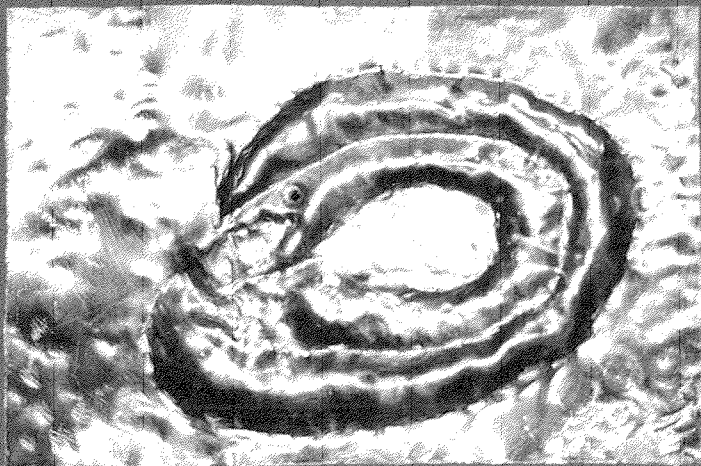
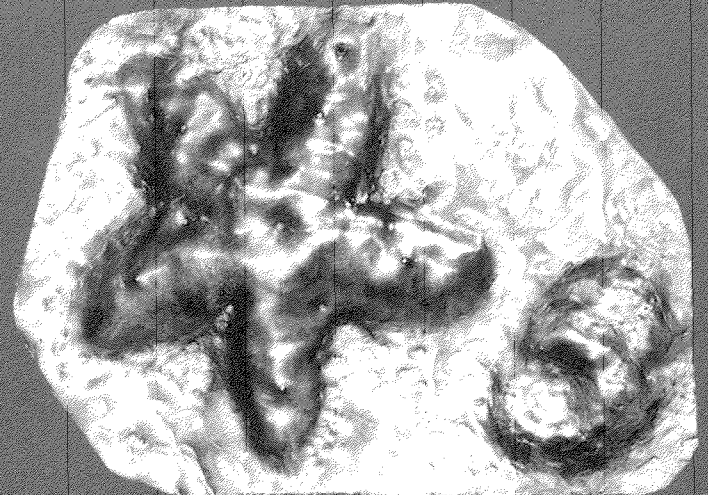
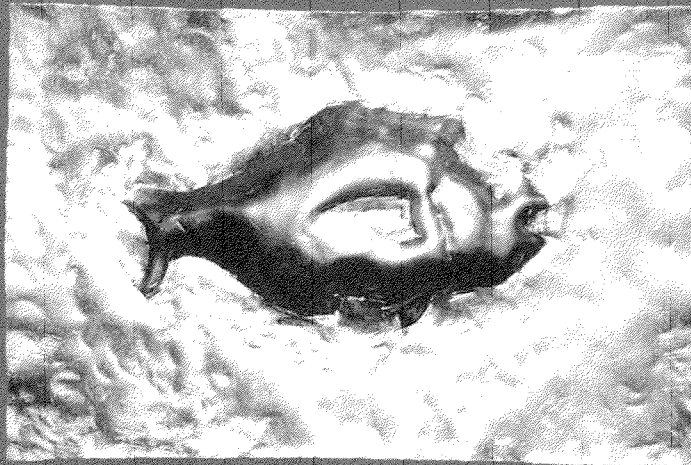
素材との出会い展

1997.7.19-10.26

みんなの
ワークショップ

金属と造形

こどもの城
造形スタジオ



特別プログラム
素材との出会い展〈金属と造形〉
1997.7.19 - 10.26

はじめに

先史時代の原始的な生活を今のような近代生活に押し進めてきた一つの要因に金属の発見と使用があります。金属の道具を持つことによって、木やいろいろなものを容易に切断することができるようになりました。金属の発見、つまり黒曜石の矢尻が金属製のものにとって代わることによって生じた事件は、手仕事の質が変わってきたことも意味しています。金属の発見は遠い将来の人類の「産業革命」を予測していたとも言えそうです。

金属といっても、私たちはそれがどのように使われているか、あまり詳しい知識はありません。高層建築や橋の建造には鉄材が、航空機や電車にはアルミの合金ジュラルミンが、それぞれの金属の特性を生かして使用されています。鉄に代表される金属がなければ、日常生活のさまざまな機能が停止してしまいます。このように現在では、身近に金属がひじょうに機能しているにもかかわらず、私たちは恩恵を受けているだけで、その実質については殆どなにも知りません。

今回のワークショップは、なます・切る・磨く・やする・たたくなど金属という硬い物質に直に触れ合いながら、金属とはどんなものであるかを体験することが主なる目的です。鉄を高温で熱すると、想像に反して、少しの力でも曲げることができることを目の前で見聞きして、改めて金属の特質を知ることにもなります。今回のワークショップは、造形活動の中で金属のさまざまな性質を知る第一歩の試みです。

また、このワークショップに引き続いて、9月と10月には「金属と音」をテーマに、造形スタジオでは「金属の音具」のプログラムを行い、ギャラリーでは彫刻家の金沢健一さんと共催で「音のかけら」展を開催しました。「音のかけら展」は《熔断》された鉄の「かけら」が、演奏され方によって、鉄の内部から音が呼吸しているかのように響きわたり、あたかも肉体の鼓動と呼応するかのような「音体験」が展開されました。硬いと思われた金属が柔らかく、音を奏でることもできることを知る、予想と意外性の「金属の不可思議体験」のワークショップを実施しました。

1998年3月 こどもの城 造形事業部

ご協力を頂いた方々（順不同）

発行 こどもの城
1998年3月20日
編集 こどもの城造形事業部
TEL 03-3797-5662
住所 東京都渋谷区神宮前 5-53-1
印刷 (有) 博英社

株式会社竹尾
山田ダンボール株式会社
リンテック株式会社
「音のかけら」事務局
金沢健一

渡辺亮
永田砂知子
吉村弘
岩崎真
南聡
Percussion Trio the Birds

ワークショップ

こどもの城造形スタジオでは、毎年夏休みに、あるテーマを基にして、ものを見たり、作ったり、作ったもので遊んだりする環境を設定したワークショップをおこなっている。素材と出会う大切さを、手を動かしながら体験するものとして「素材との出会い展」がある。今まで「紙」「木」「土」をテーマにワークショップをおこなってきた。今回の「金属と造形」は、子どもたちが金属と親しみ、素材の特性を体験できることを目的にしたものである。日常生活の中では、ジュースの缶、チョコレートやクッキーの缶箱、スプーンやフォークなどの台所用品や、ハサミ、素材としての金属の視点から、身の回りの物に目を向けてみると、いくつかの種類の金属が部分や全体を形づくっていることを発見することができる。「金属は硬い」というイメージが一般的にあるが、子どもたちが制作の中で、素材としての金属、たとえば、スチールのジュースの缶を切ったり、曲げたりすると、「金属が硬い」ということがどういうことなのかを実感することができる。「金属は硬い」が、熱を通すと柔らかくなる。そこで、“親子体験コーナー”の銅でスプーンをつくるプログラムでは、実際にバーナーで銅をあたため（＝“なます”という）、イモヅチでたたいてみると、熱する前より柔らかく、形を変化させやすいことを体験できる。

親子体験コーナーは、親子の作業が忍耐を必要とするにもかかわらず、金属のもつ魅力によって日頃の親子の関係に新しい交流のバランスが生まれた。造形スタジオでの新しい試みである。

このように「素材との出会い展—金属と造形」では、「金属でつくる！金属であそぶ！金属でまなぶ！」をキーワードにして、実際に金属を「きる、たたく、みがく、やする、まげる、つぶす、なます」を体験するワークショップである。鉄、銅、真鍮、アルミを中心とした展示物とプログラムである。就学前の幼い子どもたちも、アルミの板を曲げたり、スチール缶の小さな板にタガネを打つ時生じる、コンコン、ガチャガチャという金属と道具がふれあう音は、素材の特性を耳に記憶させる。金属との出会いは、日頃使用できない道具とともに新鮮な体験である。

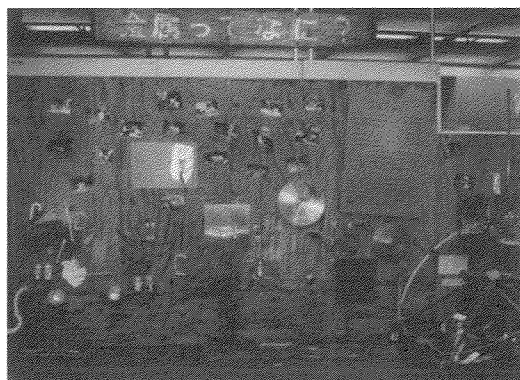
川砂から砂鉄を採っていた古来から、人間は金属を魅力的な素材であると感じていた。現代社会では、加工したものとして見られることが多いとしても、今回の「金属と造形」のように、日常の中の金属に目を向け、積極的にかかわろうとする時、その魔力は蘇ってくる。

「素材との出会い展—金属と造形」は、金属と出会う第一歩の楽しいワークショップである。

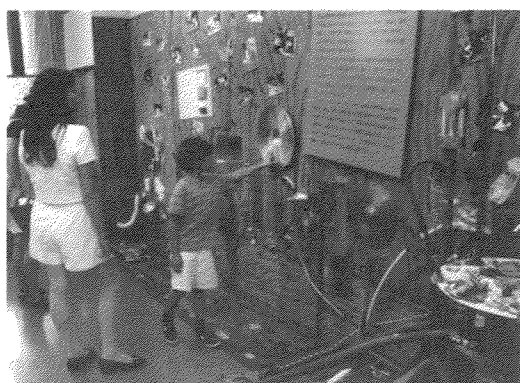


素材との出会い展「金属と造形」スタジオ入口展示

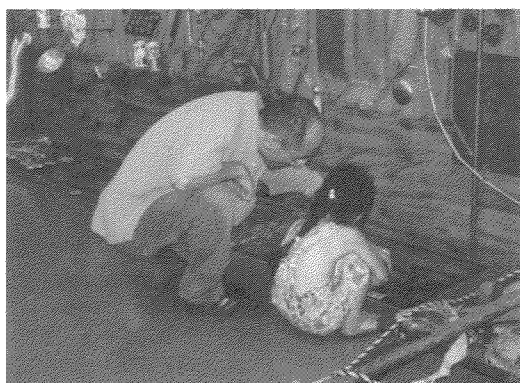
展示



造形スタジオ内の金属の展示



この展示は触れる



おとうさんと金属の話をしながら展示をみる



「親子体験コーナー」入口は板の打ちっぱなしスタイル

造形スタジオ入り口には、金属の色と鏡面の様相の違いを視覚体験できるように、鉄、アルミ、銅、真鍮の金属板を壁にはり、錆びた状態のものを含めて金属で作られた日常品を壁に吊した。自転車の車輪、車のホイールカバー、シャベル、定規、滑車など、形は用途によって異なるが、金属の一般的な特質である光沢をもった硬質な感じを与えるものがほとんどである。それと対比するように、「素材との出会い展—金属と造形」を表した木製の看板の下には、鍛冶屋を意味する BLACK SMITH の看板とともに、金属をなまし、打ち出して制作したレリーフ状の造形物を展示した。

これらの金属仲間に誘われ、造形スタジオに足を踏みいれると、都会では見慣れない板張りの小屋風なスペースが目止まる。これは、子どもばかりでなく、大人も「なんだろう？」と、つい中をのぞきたくなるような郷愁を誘う要素をもっている。舞台小屋風にも感じられる空間の前には、《親子体験コーナー》という看板がかけられているが、鍛冶屋の職人が今まで仕事をしていたような道具や設定が、特別に設置された通路からだれでも見ることができる。

さらにスタジオの中央奥の正面には、入り口の展示を引き継ぐように金属でできた日常品と造形作品が展示され、溶けた状態の鉄とアルミも床に置かれた。それらは、金属がこんなにも微妙な違った色合いをもち、自在に形を変えることができる素材であることを感じ取れるものである。一見雑多に並べられた種々の金属も注意深くみていくと、人間の手による加工がなされ、それによって無限の可能性をもつ金属の素材性を表わしているのが読み取れる。

展示パネルのひとつをここで紹介する。

一口知識こぼれ話「アルミフォイルのお話」

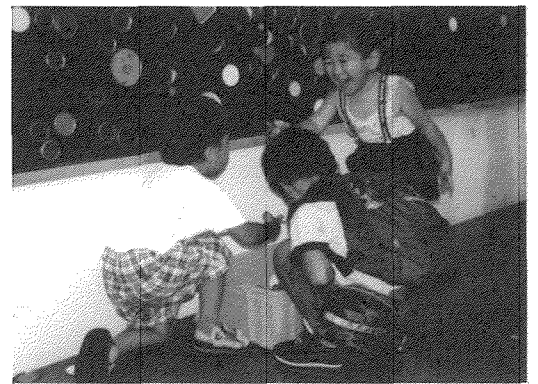
おべんとうのおかずやおにぎりを包んだりするアルミフォイルって知っている？ 片方はきらきら光っているのに、もう一方は少しもっているね。工場の人に聞いてみると、その答えは簡単。別に裏表を決めるために、光っている面と光っていない面を作ったのではないんだって。アルミフォイルは、すごく薄いので、工場で作るときに一枚では技術的に生産できないそうだ。そこで最低でも2枚重ねた状態で、金属を薄く延ばす機械（ローラー）にかける。「うどん」や「そば」を延ばすときに、麺棒という丸い木の棒をつかって、うすく延ばすようにね。機械を使ってアルミ板を薄く延ばして、2枚重ねで作った「アルミフォイル」を1枚づつにはがすと、ローラーに当たっている面は光っていて内側の面はあまり光っていない面になるんだって。科学は観察するところから始まるけれども、造形美術も「もの」の成り立ちや様子をよく注意して見るところから「感性」と「感覚」が養われるんだってさ。どちらにしても、ものを注意して見ることは、大切なんだ。今日の話はこれでお終い。

体験

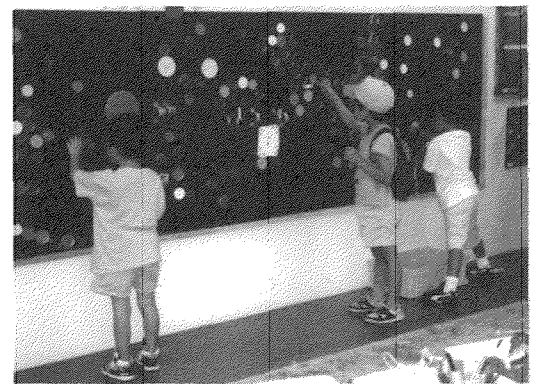
チャリン、カチャン、ジャラジャラ、これは、子どもたちが缶の蓋や留め金などをマグネットの壁につけたり、はずしたりして遊んでいる音である。造形スタジオで子どもたちが出会う金属の世界は、鳴り物入りだ。これは、小さい乳幼児でも金属と出会うことができる仕掛けられた体験プログラム《マグネットプレイボード》である。磁石に反応する金属の性質と金属そのものの手触りを体験できる。《マグネットプレイボード》では、日常生活の中で使っている金属の断片であるスチールの缶ジュースの蓋をもちいている。缶の蓋には、7色のペンキをふきつけているので、缶の冷たさはなく色とりどりの暖かい遊具の印象をあたえる。壁のそばに用意した何の変哲もない四角い箱（40 cm×50 cm）にどっさり入れられた缶の蓋、建築材料の金属片やフック状の金属材料なども入っている。子どもたちは自分で気に入った色の蓋や好きな形の留め金を探し、組み合わせながら、虫や動物、大きな顔、飛行機やヨットなど、いろいろな形を生み出しては、消していく。具体的な形でなくとも、ただペタンと張り付ける行為がおもしろいのでボードの全面に蓋をくっつけ続けようとする3歳の子ともいる。壁に取り付けた1 m×4 mの大きさのマグネットボード上では、子どもたちの手によっていろいろな形が缶の蓋で作られていく。まだ歩き始めて間もない乳幼児が丸い缶の蓋を壁からはずして、箱にいれる。日頃使っているスプーンもフォークも金属だが、金属の遊具を使う機会はあまりない。つける・はずすという行為と箱にいれるとカチャンとなる音が大変気に入ったようである。金属のもっている性質を幼い子どもたちも遊びの中から体験している。

《マグネットプレイボード》の他に、開館以来、造形スタジオでいつも体験できる“プレイングボード”がある。それは、子どもたちが思いのままに水彩で描くことができる、通称「らくがきボード」である。この素材も鉄板の上に塗料を吹き付けた、いわゆるホーロー鉄板でできているものである。紙で描く時の絵の具が紙に浸透していく感触と異なり、どちらかという、すべるような筆の感じである。布の上やプラスチック上に描く場合とも異なる経験で、それは金属を土台とした素材のもつ特性によって成り立っている。白い壁の上部には、水がでてくる管があり、壁表面をスキージーで洗うと、再び白い壁面にもどる。《マグネットプレイボード》と《プレイングボード》にはさまれた造形スタジオは、金属材を多く利用した現代建物を象徴した金属の遊び空間といえるかもしれない。

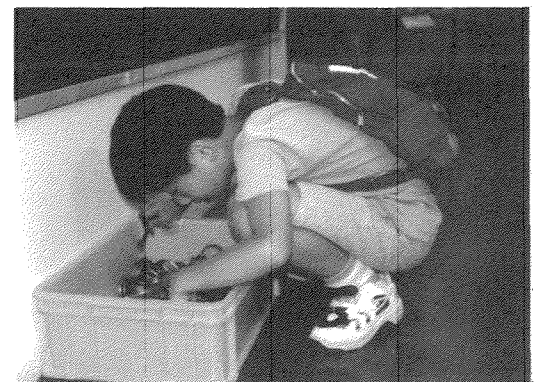
「素材との出会い展—金属と造形」では、ワークショップの要である「体験」を、二つのプレイングボードに集約させるとともに、制作の中で素材にさわったり適切な道具を使って金属を変形させる行為の中で、いろいろな体験ができるように設定した。



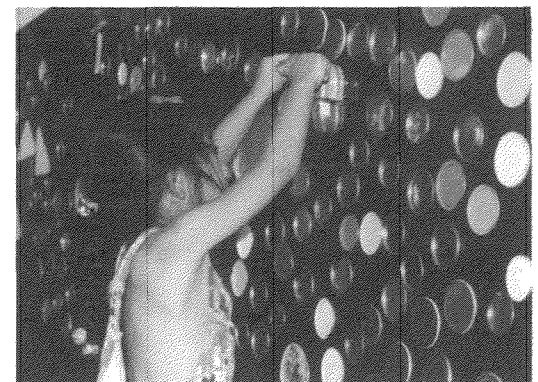
マグネットボードで話しもはずむ幼児たち



なにげなく始めても次第に集中していく



次に何をくっつけるか、探している小学生



もうすぐできあがりかな？

親子体験コーナー



体験に入る前に指導員から金属の話を聴く



道具の使い方の説明を受ける



親子で協力して作業をすすめる



親子体験コーナーでつくるサンプル

板張りの入り口から、裸電球に照らされ道具がそろった仕事場に入ると、日常空間から隔たった鍛冶屋風な世界が広がる。「親子体験コーナー」は、硬い金属が手を加えることでどんどん形を変え、軟らかく暖かみのあるものに変化していく過程を親子で体験するものである。金属を加工するために、「きる」「たたく」「みがく」「まげる」「やする」「つぶす」「なます」「つなげる」といったさまざまな技法が必要である。金属を容易に加工できないために、腕・手首・体・足を使った身体動作の要素を多く含んだ体験とともに金属と出会うことができる。

このように、きる、たたく、みがくなどの金属の特性を表わした行為は、手を中心にした身体の力とバランスを工夫しながら体験されるものである。ひとつひとつの作業には長い時間と粘り強い精神が必要である。親子は力を合わせて、協力しながら根気よく金属の性質と出会っていく。ガンガチャ、コンコン、“イタッ！”ポー、ジュ。銅を金床の上に置いて、力いっぱい金槌で打つと、思ったより以上に手と腕に振動が伝わる。打ち続けると、意外にカンカンカンやコツコツコツなどのようにリズムカルな音になっていく。造形スタジオはもはや鍛冶屋風ではなく、鍛冶屋そのものになっているのである。

軟らかい性質のものもあるが、一般的に金属は硬い素材である。硬い金属は手でまげることができない。金槌、ペンチ、ヤットコ、金床など金属用の道具を使って曲げてみる。それでも曲げることができない場合、火で金属を柔らかくすることができる。金属は熱に弱いのでバーナーの炎をあてると、金属の表面の色が変化する。体験を十分に積んだ人はその表面の色で、金属が柔らかくなったことがわかる。熱した金属の部分の曲げることができる。金属は熱を通しやすいので、炎を使った後は、素手でもつかうことができない。そこでヤットコではさむ。このように道具と炎を使いながらの金属体験は真剣そのものである。

「親子体験コーナー」での体験は、銅によるスプーン、鉄による風鈴、アルミによる皿、銅と真鍮による鎖、鉄による鏡、銅によるペンダントである。それらは、具体的な形に仕上げるのが目的ではなく、変化させる過程を充分体験し、どこかで出会った金属、あるいはどこかで出会うだろう金属についての見方や感じ方をより深めるためのものである。開期中、金属に魅せられ、連続3回もやってきた親子がいた。紙や粘土と異なり、たやすく変化させることができない金属であるが、一旦その魅力に気づかされると、その深さを追い求める快感と充実感を与える素材であることを物語っている。

素材との出会い展「金属と造形」のホンモノ体験として、「親子体験コーナー」は今回のワークショップの主要なプログラムである。

体験1 銅 なます・たたく・やする・みがく

親子体験コーナーの『体験1』は、「スプーンをつくろう」というテーマであるが、必ずしもスプーンを作ることを目的とするのではなく、制作過程での金属の特性を体験することが重要である。

【制作過程】15ミリ×150ミリ、厚さ4ミリの銅の帯板を焼き鈍（なま）し、冷やし、ヤットコではさんで金床の上で打つと、銅板は薄く延びる。それが硬くなって延びなくなったら、また「焼き鈍し、打ち延べ」を繰り返す。形ができてきたら、柄のカーブをたたいて整える。すくう部分も丸い当て金にあてて外側から金槌でたたく。余分なところは金ばさみで切って整える。やすって、最後に金属磨きで磨いて仕上げる。

バーナーの炎を銅板にあてる時に、親子の表情は真剣になる。炎という危険物に対しての緊張感と金属の加工という今までに体験したことがないものへの挑戦である。銅板を打つことによって身体に響く振動は、2時間の経験を体だけでなく、手と目と心に響くものとなって残っていく。

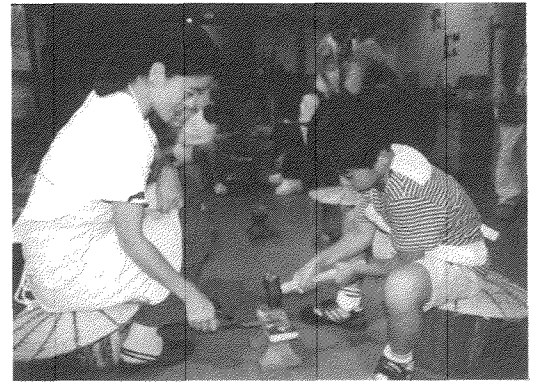
体験2 鉄 きる・やする・みがく

「ベルをつくろう」は、金鋸で鉄パイプをきる。穴をあける。この穴を丸だけでなく色々な形にすることができる。やすりで切り口をそろえ大きな傷もやすっておく。サンドペーパーは荒い番号から順に細かくやすりをかけられるものに変えていく。#1200までサンドペーパーをかけ終えたら、金属磨きで仕上げる。銅や木の小片に真鍮線を通してパイプの中につる。中につるすものによって音色が違ふ。親子体験コーナーの対象は6歳以上の子どもと親であるが、《みがく》という行為は単純であり忍耐を必要とするので、小さい子どもにとっては、できるまでの作業を親にまかせる場合が多くある。近ごろは、日常生活の中でも親子で協力して仕事をする機会はありません。親が子どもにまかせることや子どもの忍耐力を把握し、相互にバランスのとれた体験ができることが理想である。親子のスムーズな関係性がみられるのは稀である。

体験3 アルミ なます・たたく・きる・みがく・やする・つなげる

「アルミで皿やフライパンをつくろう」20センチ×20センチ、厚さ1ミリのアルミ板を好きな大きさの円に、金切り鋏で切りとる。表面に油性マジックで印をつけておき、バーナーで印がなくなるまで焼きなます。熱いので、ヤットコでつまみ、水の中に入れて冷やす。砂袋の上で外側から木づちで軽くたたいていく。万遍なく打ったら今度は内側からたたいていく。硬くなってきたら、もう一度焼きなます。金床の上で平らな金槌でたたくと、底が平らになる。取っ手をアルミ板やアルミ棒で作り、ドリルで穴を開けてリベットでつなぐ。ふちをサンドペーパーでやすって仕上げる。

たたくことと形をつくっていくことの関連が、視覚的にはっきりわかるので、年齢の低い子どもでも、手と目の経験がほどよくバランスのとれたものである。親子の協力関係も調和よく成立している。



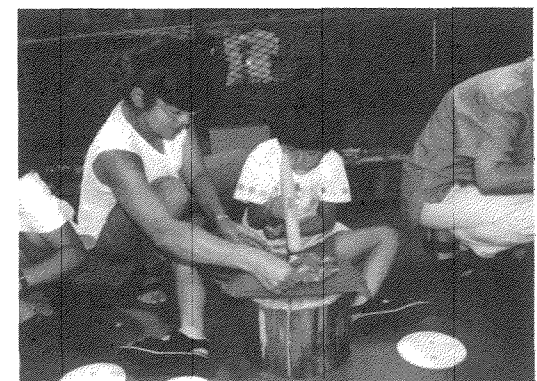
つぶす



なます



きる



たたく

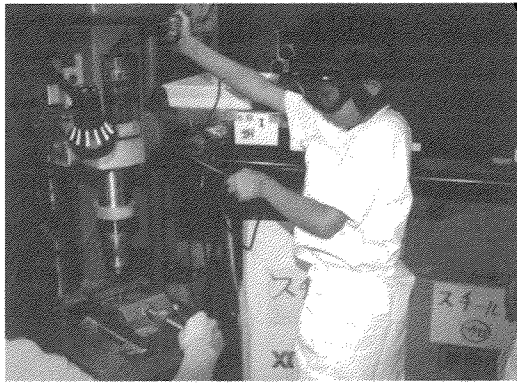
体験4 銅、真鍮 まげる・きる・みがく・つなげる



まげる・つなげる

「くさりをつくろう」では、真鍮線、銅線、アルミ線を用いて、鎖をつくるプログラムである。細いパイプにぐるぐると真鍮線、銅線、アルミ線を巻きつけ、輪っかをひとつひとつ切りはなす。平たくしたい時は、金床の上で金槌でたたいて、つぶす。いろいろな形のわっかをつくっても楽しい。ヤットコとベンチで輪っかをつなげてゆく。つながったら金属磨きとみがき布でみがいてでき上がり。巻く、曲げる、つなげるの行為は、金属体験の中でも比較的すぐにできるものである。一方、同じ丸い形を何個も作ろうとした場合、熟練した技術と経験が必要である。今回の親子体験コーナーの意図は、金属に出会い、触れ、金属がもっている性質を体と心で体験することである。ここでは、くさりの輪っかの形がそれぞれ微妙に違ったものであっても、その美しさを感じることができる素材であることを体験から知ることができるのである。

体験5 鉄 やする・つぶす・みがく



あなをあける

「かがみをつくろう」では、2時間の間、70ミリ×70ミリの鉄板をひたすら磨くという行為を続ける。すぐ飽きると思いがちな同じ行為を続けても、徐々に鉄の表面が変化し異なる表情を見せ始めると、努力がむくわれたように、さらに磨きに熱がはいる。鉄板の角は、鋭利になっているので、やすりをかけて面をとる。鏡の面はサンドペーパーの荒い方から順にかけていく。黒い酸化膜をとるのにちょっと力があるので、木端にサンドペーパーを巻くと使いやすい。仕上げの#1000、#1200のサンドペーパーをかけた後、金属磨きで仕上げる。ドリルで穴をあけ、適当なボルトをさしこむと、鏡をたてることができる。穴をあける時は、必ず、万力にはさんでドリルを使う。

体験6 銅 なます・たたく・みがく・やする



みがく

「ペンダントをつくろう」の中で、なます、たたく、みがく、やするといった基本的な金属体験の他に、“象がん”という技法を体験する。銅、真鍮を使って、焼き鈍したり、穴をあけたり、象がんする。厚さ4ミリ、大きさ40×15ミリの銅の帯を焼きなまし、打ちたたき、厚さ2ミリくらいになったら、喰い切りを使って形をととのえる。象がんするところは、真鍮の線の太さの穴をあけ、ルーターあるいは太めのドリル刃で面をとり、真鍮の線を通す。喰い切りで2ミリ位残して切る。金床の上でしんちゅう線をたたきつぶして、穴を埋める。いろんなタガネを使って、模様の刻印もつくる。金属磨きで仕上げる。『ペンダント』は装飾性を強く出せるプログラムだが、金属のいろいろな特性が体験できるものである。



やすりをかける

制作

「素材との出会い展」のシリーズで取り上げてきた「紙」「木」「土」では、子どもたちはいろいろな機会に制作する体験をもつことができる。今回のテーマである「金属」を切ったり、貼ったり、組み立てたり、形を作ったりする経験をもつことは、特に幼児や小学生にとっては多いとはいえない。「切る」行為を例にとっても、他の素材に比較して、金属では、技法と道具の関係の中で、手の力や火を扱うといった要素が深くかかわっている場合もあり、切ることは容易ではないのである。それだけに、年齢の小さい子どもたちがそれらを体験することができれば、体験の醍醐味は大きいといえる。

小学生の高学年になれば、金属を扱うことも多くなるが、造形スタジオには、幼児や小学校の低学年の親子連れが多く訪れる。そこで、初めての試みとして先のページで紹介した「親子体験コーナー」を設けた。幼児を含む6歳以上の親一人子ども一人のカップルが一つのものを制作するコーナーである。「体験コーナー」と称しているが、『スプーンをつくろう』『ベルをつくろう』『皿をつくろう』『鏡をつくろう』『ペンダントをつくろう』のように制作を方向づけたものである。最初の計画では、「きる、なます、たたく、やする、みがく」といった原初的な体験を目指したものであったが、結果的には、“つくる”ことを目的としたものになってしまった。

今回のワークショップでは、年齢の幅も広く考え、多くの子どもたちに「金属体験」をしてもらうために、素材として加工しやすい軟らかい金属を中心にした。金属加工のために用いる従来の道具や制作方法に限定せず、小さい子どもたちが金属に触れることで金属が他の素材と違うことに気づくことができるように、多様かつ柔軟なプログラム作りを心がけた。アルミニウムでできたジュースの缶は、幼児でも容易く折り曲げることができる。制作を通して、ジュースの缶の中にもアルミ製、スチール製のものがあり、色、硬度、質感の違いがあることに気づく。日常生活の中で意識されることがなかった金属との意外な出会いである。アルミのジュースの缶を細長く切った薄い板状のものをU字型に曲げ、それを指ではじくと弾力のある動きをする。そのような金属の軟らかい側面が弾いたり動いたりするおもちゃの制作に発展する。2歳半の小さい子どもでも母親と一緒に装飾する部分を作ることができ、自分でつくったもので弾きながら遊ぶことができる。スチールの缶の場合、アルミよりも硬く、それをある形に切ることは難しい。幼児や小学校低学年であればなおさらである。しかし、木づちを使って、色々な形のタガネで模様をつけることは、小さい子どもにもでき、トンカン、トンカンという体験は楽しい。このように、制作するための金属の種類も、日常の中で使うものを素材にしたものから、7ミリも厚みのある鉄を磨くという専門的な技術を体験しながら制作するものまで、金属がもつさまざまな側面を重視した制作過程を提示したことが今回の特徴である。



「金属と造形」スタジオでの制作風景

親子プログラム

ビョ～えもん

アルミニウムの缶を1センチ×15センチの大きさの帯に切っておく。子どもたちはそれをU字型のトンネル状に折り曲げる。固定する前に、それに輪ゴムを通してから接着テープでとめる。8センチ×10センチの台紙にU字が逆さまになるように底辺を接着テープで固定する。輪ゴムをひっぱって放すと、アルミの帯がビョ～と動く。名前の由来もそこからきている。紙を、人や動物の顔や手足の形に切り抜き、アルミでつくった動く基本形体に、接着テープでとめてできあがる。装飾物を、U字型に橋を渡すように頑丈に接着テープでとめてしまうと、軟らかい動きが失われる。動きを伴うプログラムの場合、素材性と機構の関係が微妙に作用する。制作を通じて、アルミのもつ金属としての軟らかさと硬さの微妙な特性が体験できるものである。

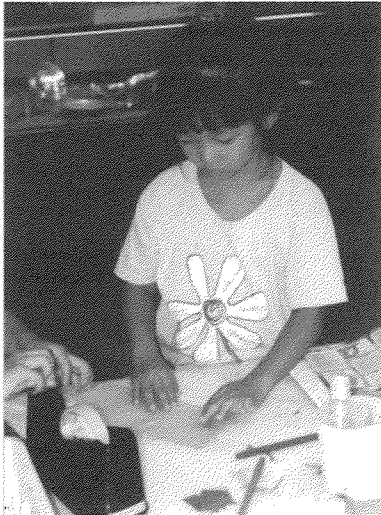


「ビョ～えもん」の飾り付けをしている

くねくねポ～ン

紙を切ったり、貼ったりすることは、ハサミに興味をもち、道具を使うことに興味をもち始めた幼児にもできる楽しい行為である。その切り紙工作と金属を組み合わせることによって、立体的な効果を出すことができるプログラムとして生まれたのが「くねくねポ～ン」である。20センチの長さの直径1ミリのアルミの針金を細長く薄い紙カラベに接着テープでとめる。それを体に、手足や顔を紙で作り、不思議な動物に仕上げる。最終的には、針金の部分は、隠れた存在となるが、非常に大切な要である。

小さい子どもたちは金属そのものを加工したり、変形させることはできないが、軟らかいアルミの針金によって曲線が自在に作れるため、「くねくねポ～ン」で遊びながら、「曲がる」という金属の特性を体験できるのである。



「くねくねポ～ン」針金をまげたものをカラベ紙にのせているところ

トンテンかん

小さい子どもたちが大きな金属板を切りとったり、形をつくったりして、金属という手応えのある素材を体験することは難しい。素材を加工するために、特別な道具や技術、そして長い時間が必要になるからである。幼児や小学校低学年に、自由な時間の流れの中で、硬い金属を体験させるために、タガネで金属に模様をつけるという技法を取り入れたのが「トンテン缶」である。スチールの空き缶を一辺3センチの正方形のチップ型に切り、材料として用意する。スチール缶でも、金と銀の色合いをもつものがあり、子どもたちは一枚のチップを選ぶ時に、その違いを発見する。3センチ四方の小さな世界に5ミリ幅のいろいろなタガネの形を木づちで一つ一つ打ち込みながら、金属の硬さと堅牢な質感を体験するのである。模様を打ち込まれた金属の一片はカラフルな紙に張り付けられ、貴重なメタルのカードになる。



「トンテンかん」タガネで模様をつくっている。一打ちごとに模様の確認をする子ども

小学校3年生以上のプログラム

まげメタル

一筆がきの要領で、直径3ミリの一本の針金を曲げて形をつくる。形作られた針金の内空間に、赤・青・黄色のカラービニールで覆われた細い針金で装飾していく。平面の形から、立体に展開することもある。ペンチを使って針金を曲げるには、経験と技術がいる。しかし、作りたい形のイメージがはっきりしていると、未熟であるはずのたよりなげな線が、造形性を増すことがある。「まげメタル」の中の子どもたちの作品には、その心地よさが表われている。仕上げた有機的な形体の作品を、木片の台にとりつけると出来上がる。空間にすくと立った作品は、線が形を生み出すことができる無限の価値を暗示しているようでもあり、立体になりつつある形の残像のようにも見える。



「まげメタル」台につけた針金のバランスを整えている

たたきメタル

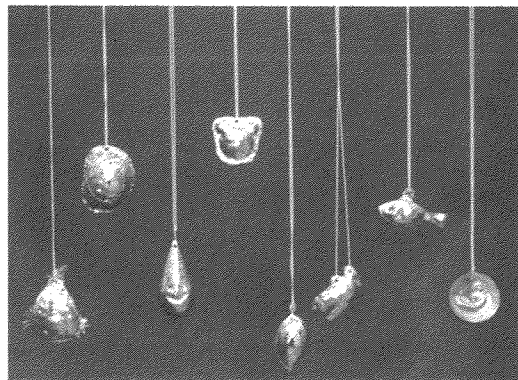
1ミリのアルミ板をたたきながら、ある形を切り取り、装飾を加えてバッジにしたり、ペンダントにしたり、飾りタイルにする。砂袋の上でイモ鎚で形を打ち出していく。アルミ板は、子どもたちが打ち出しをするには、適当な金属である。「たたきメタル」では、イモ鎚の一打ち一打ちが片面だけではなく両面に影響をあたえるため、凹凸の関連性が相互に裏表のつながりをもつという金属の特性を体験できる。金属はたたくと、その部分が硬くなり、素材がそのように変化する様子は、他の素材である紙や木や布とは異なった、生き物のような感覚である。たたくと密度が高くなるため、金属の表面が硬くなるというのは、理屈ではわかるが、それを実際の手応えの中で体験することによって、本当の理解が始まる。



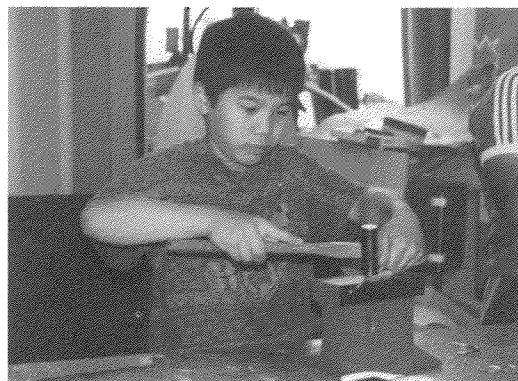
「たたきメタル」金属の音が響く中で、徐々に自分の思う形に向かっている子どもたち

メタザイク

細い針金や太い針金を曲げたり、曲げたものをたたいて平たくしたり、いろいろな形をつくっていくプログラムである。メタザイクのプログラムでは、こまかく、あるいは工夫して細工をすることによって、どこにでもある針金が見違える程のものに変化する可能性を体験できる。できたものは、アレキサンダー・カルダーの作品の仲間入りができそうな、指輪、ネックレス、ペンダントなど、造形性の高い装飾品になることがある。針金はアルミ製のものであるため、子どもたちの握力でも、十分に加工することができる。たたきすぎると、それを曲げようとする時、折れる場合がある。そのような体験も金属が硬くて強いばかりでなく、種類や加工方法によって、様々な側面をもっていることが体験できるのである。



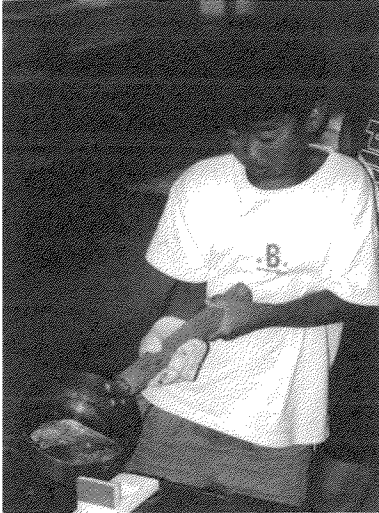
「たたきメタル」こどもたちの作品



「メタザイク」アンビルの上で形を整えている。手つきもいたについてくる

一日造形教室

メタリック・スティック



「メタリック・スティック」 錫を溶かして、石膏の型にながしているところ

直径3センチの竹を40センチの長さに切る。大きき10×6センチ・厚さ1.5センチの石膏の板を作り、下絵を書いて彫刻刀で彫る。そこに必ず竹を差し込む部分の直径1×2cmの溝を彫っておく。コンロで錫を溶かし、石膏で作った凹型のモデルに流し込む。錫を溶かす時、割箸で鍋の底をこすって焦げない程度がよい。少したってから、石膏から錫の型をはずし、水をかけて冷ます。竹の棒に錫で作った装飾部分をホットボンダーで固定する。竹の棒には、焼きごてで模様をつけたり、アルミのテープなどで飾りつけをする。これは金属の铸造という技法を、溶けた金属と石膏との相性や固まり具体を目の当りにしながら体験できるプログラムである。型取りされた錫の塊を手にした時には、他の素材では味わえない重みを感じさせる。

金キラ銀

「金キラ銀」は箔をはる技法を体験できるプログラムである。流木、木の枝、石、貝殻などの上に、金箔や銀箔をはる。まず箔をはる物のほこりをとりのぞき、水で薄めた木工用ボンドを塗る。箔は破れやすいので、あかし紙と一緒に箔ばさみで持ち、貼る物の上のにせる。あかし紙の上からそっと抑え、紙をとって、乾いた軟らかい筆で凹んだ所を軽く押し込む。模様をつけたい場合は、模様の形の部分にボンドを塗り、模様より少し大きめの箔をのせ、しっかり押さえて、ボンドが乾いてから、余分な箔を筆で払う。凹んだ物や曲面の大きいものは、三角形に切ったものを、箔どうしが重なるように少しずつ貼っていく。できたものを箱に詰めると、宝ものが誕生する。

身近な見慣れたものが、もとの触感性を残したまま金きらと光るものになる。ありふれた物が大切なものにみえてくる瞬間を、子どもたち自らが生み出すという貴重な体験である。

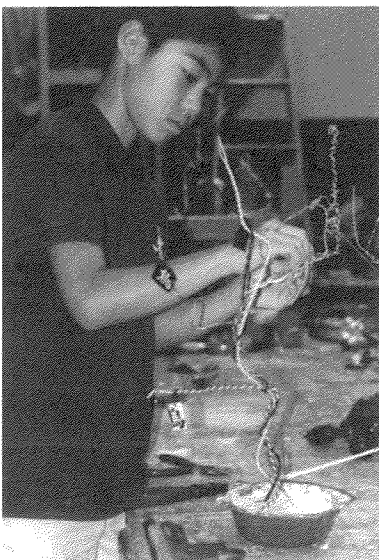


「金キラ銀」 金箔を石の上に慎重にはっているところ

針金ボンサイ

針金やアルミ線、銅線などで作り上げる人工の盆栽である。

高さ30センチの盆栽を作りたい場合は、50センチの長さの針金で幹を作る。2本の針金をそろえて、その端を万力で固定する。他方の端をドリルチャックにかませてドリルを回すと、2本の針金がより合わされる。より合わせた針金を何本かあわせて、ねじり、好みの枝ぶりにする。20～30センチの2本の針金をより合わせたものを幹にからませ、ねじりながら、枝の形をつくっていく。木の実や葉、花は、廃材のスチール缶を切り、穴をあけて、枝にひっかける。粉と水でつくったとろとろの状態のセメントを、針金でつくった盆栽をセットしたボウルに流し込む。固まったボウルから取り外して出来上がる。幹をつくる時、自然の木のように根っこ部分を広がるように作っておくと、セメントの固定がやりやすい。色とりどりの線の組み合わせで、同じ形でも姿が変わって見える。木の枝ぶり、上下に高い木、横に広がる木など、作る人の感覚によって、さまざまな盆栽が生まれる。



「針金ボンサイ」幹の部分もでき、葉っぱや実などで装飾しているところ

ミニストーブ

ミニストーブは、みかけは小さいが、本格的に煮炊きができる。

直径10~12センチ・高さ15センチの蓋付の缶の底に3つの穴をあける。缶の横に8×6センチの四角い窓をあける。縁は危ないので巻き返し、一方の横は、扉の要にするためにパイプ状にしておく。窓より二回り大きく金網を切り、縁を巻き込んでおく。本体のパイプ状のところにアルミ線を差し込み、それに金網を番線で窓の位置に合わせてとめる。金網の扉に留め金をつけ、本体に留め金受けをボルトでつける。

蓋に煙突をたてるために、直径15ミリのドリルで穴をあけ放射状に切り込みをいれる。穴にアルミパイプ（外径25×200ミリ）を差し込むためにソケットをつけ、パイプを差し込んでから裏から切り込みを曲げて固定する。本体の底にタテナットで足を3本つける。耐熱塗料を塗って出来上がる。

最近では、ガスコンロや電気コンロが普及して、ストーブの姿を見かけることはほとんどない。この小さなストーブには、火をつかう人間の営みの原点が見えるようだ。

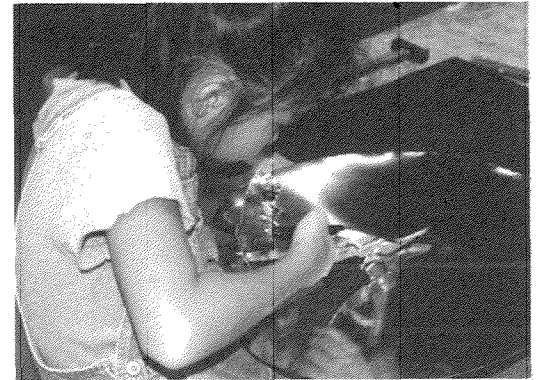


「ミニストーブ」互いに助け合いながら本体に穴をあけているところ

ケロランタン

一枚のブリキに円形の型紙を写し、切り取る。ロウソク立ての部分を取りタガネで切り出す。真ん中に穴をあけ、ブラインドリベットでロウソクをたてる芯をつける。円の中心まで切り込みを入れ、端をリベットで止める。止める位置で円錐の高さ変わる。ロウソク立ての部分を折り曲げ、本体と固定する穴をあけ、リベット止める。持ち手の木と本体をつなぐために、L字型の金具を裏にリベットで止める。持ち手の木に縦に切り込みをいれ、L字金具のもう一方の端を差し込み、穴をあけて木ネジでとめる。本体の傘の外側に好きな色を塗ったり、持ち手に模様を彫ったりしてできあがる。

「ケロランタン」は、金属の鏡面を生かし、炎が反射することによって、強い明りを放つものである。一見古風でありながら、金属を紙のような感覚で切り、携帯用ロウソク立てをつくる手法には、新旧の微妙なバランスが不思議な味を出しているプログラムである。



「ケロランタン」大きなブリキ板を金切りバサミで切っているところ



「金属と音コーナー」身近にあるボールや空き缶をたたく子どもたち



「チューブっかん」ジェット機型ができてあがり



「くるくるシャラリン」おとうさんに巻くところを手伝ってもらっている弟。おねえちゃんは一人で全部できた

素材との出会い展「金属と造形」の夏休みワークショップが終わると、金属の素材性をさらに展開するために、「音」とかかわらせたプログラムを試行したのが「金属と音」である。

造形スタジオの奥のコーナーには、金属でできたいろいろなものを設置した。例えば、子どもたちの家にあるような、金属のお菓子箱、ジュースの缶、スプーンなどの食器である。また、建築用のネジやパイプなどを置き、身の回りにある見慣れた金属がどのような音がするかを試してみるののである。さわったり、たたいたり、軽く床に落してみたり、音を出す行為もさまざまである。見慣れた形や色をもつ金属でできた物も、試してみると意外な音がしたり、重さが予測と違っていたり、その時々で新しい発見がある。乳幼児などの小さい子どもたちは、親が率先して金属の音探しを楽しむと、子どももその行為に引き寄せられ、金属の音体験にいざなわれる。音を出すことになると、次には、自然とリズムが生まれてくる。自分で生み出したリズムは、体から出てきたものなので気軽に楽しめる。

親子プログラム チューブっかん

紙で筒をつくり、円形の口のところに金属片をつけて、そこをたたく音具である。

15×12センチの大きさのWクラフト紙をチューブ（円筒）型に丸める。一方に3×2.5センチの大きさの廃材のスチール缶の一端を接着テープでとめる。例えば、それをくちばしに見立てると、紙で翼を切り抜き、円筒に接着すると、鳥になる。いろいろに見立てることによって、ロケットになったり、動物になったりする。円筒が、金属片を微妙に反響させる音の道具である。10センチの細い竹串の先にジュースの缶のプルトップを接着テープでとめる。それがスチールをたたくマレット（たたき棒）になる。

音としての派手さはあまりないが、スチール缶とプルトップがぶつかり合うことで生じる、金属のもつ硬い音質を体験できる。

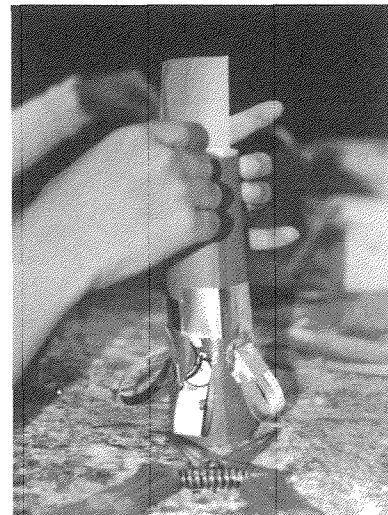
くるくるシャラリン

ペンに巻きつけ螺旋状にしたアルミ線を、長さ15センチの細い竹串に通す。両方の端に色ラシヤ紙を貼り、振るとシャラリンと音が出る。頭としっぽの形にきった紙を両端に貼って魚に見立てたり、丸や三角などの幾何学形体を貼り、模様をつけたり、さまざまに飾りつけることができる。一本の金属の線を螺旋型にしただけで、幼い子どもたちでも音を生み出すことができる楽しいプログラムである。ここでは、アルミ線を利用しているが、真ちゅうや銅線などいろいろな材料で試すと、素材によって音が微妙に異なることに気づく。

一年生以上のプログラム

ビヨロンキン

アルミの缶から5ミリから1センチの幅の帯を10センチの長さに切りとる。水滴の形になるようにまげて、それを大中小と数個作ったものを、前もってつくった直径6センチの紙の筒にテープで固定する。その固定した根元に、アルミの針金を入れると、音がより鮮明になる。缶の帯の太さや長さによって音が異なる。紙筒は、好きな裏表の違う2色からなるWクラフト紙を子どもたちが選び、装飾も紙やカラーソフトペンで自由におこなう。はじくと音が出る「ビヨロンキン」は、音色そのものが太鼓のように強い印象は与えるものではないが、水滴型のアルミ弁を指ではじくと揺れる様には、手作りのやさしさがある。



「ビヨロンキン」音の出ぐあいも確かめた後で、飾りつけをしているところ

ふりシャラ

空き缶を1センチ四方の大きさに切り取った材料を前もって用意しておく。子どもたちは、花や星、ハートの形などいろいろな形体にきりとる。それらの中央に穴をあけ、10～15センチの長さの竹串に通す。3ミリの太さのアルミの針金を使って、好きな形の取っ手部分をつくり、最初に作った缶の破片を通した竹串の両サイドに巻きつけ、かなづちで軽くたたいて固定する。それをふると、シャラシャラとい音をする。以前、「バンブーじゃらん」として、取っ手を竹で作ったプログラムをおこなったが、今回のものは、金属を曲げたり、たたいてつぶしたりして、取っ手の部分を子どもたちの好きな形体でできるという、金属の加工を体験できる要素がある。思い通りの形にならない場合もあったりするが、金属の抵抗感を味わうことができるものである。



「ふりシャラ」針金をたたいて、取っ手に竹を固定しているところ

3年生以上のプログラム

フラメンかん

「フラメンかん」は、フラメンコの時に打ち鳴らすカスタネットのイメージからきたネーミングである。アルミの缶の底を切り取ったものを二つ用意する。それら二つがあたる時に音が出るのが、通常のカスタネットである。「フラメンかん」は針金を触覚のようにゆるやかに曲げたものを下の缶の底につけ、上部の缶の蓋を指ではじくと、その針金が上部の缶にあたる時に出る音を楽しむものである。その針金にワッシャーやスパンコールを通して装飾すると、はじくたびに、それらが動いて音がさらに加わり、複雑な音を生み出すことができる。「フラメンかん」の形状そのものが、手の平にすっぽりおさまる魅力的なものなので、子どもたちは作る意欲をそそられ、音と動きのユーモラスなオブジェを仕上げていく。



「フラメンかん」音を出す針金のじゃまにならないように、星形の飾りの位置をみているところ

金属と音体験 1

“どんな音がするかな？コンサート”

10月19日 15:00～ 造形スタジオにて



渡辺亮さんと子どもたち

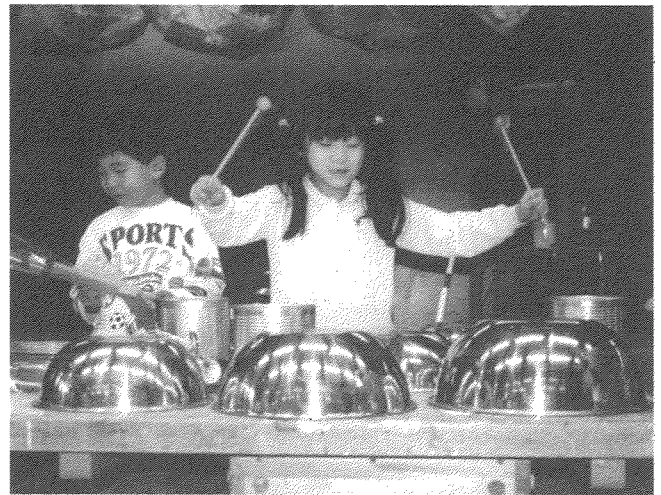
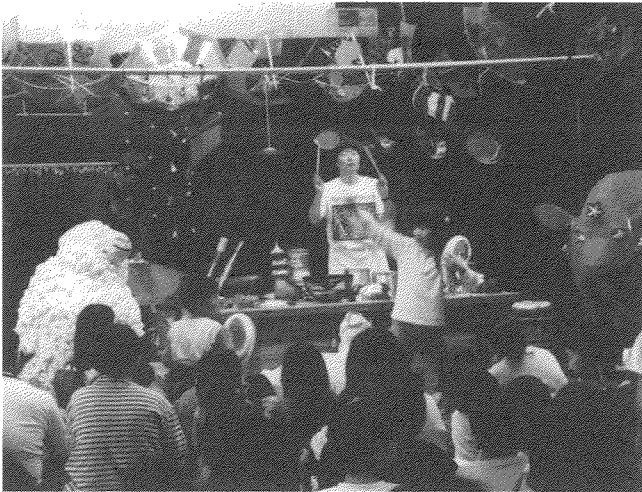
渡辺亮さんの専門はパーカッションである。学生の時は、美術大学の工芸科の金工課程で、家具制作の課題の時さえ、スチールドラムをつくっていた程、音を作るのが大好きな人である。また、当時サンバのサークルを始めて作ったという程、みんなでリズムを楽しむのも大好きである。亮さんは、子どもたちのために演奏をしたり、子どもたちと音を作ることも、また大好きである。そんな人となり子どもたちは即座にキャッチする。「これはどんな音がするのかな？」という始めの問いかけにも抵抗な

く答える幼児たち。「実はぼくも知らないんだ」という亮さんの心暖まるやりとりは、音を一緒に作るために必要な、大切な心の交流が自然なままにおこなわれている。今回の「金属と音」では、身の回りにある缶や箱、造形スタジオのスタッフが作った金属の簡単な創作音具を使って、いろいろな音を出しながら、子どもが本来もっているリズムに対する素直な気持ちを、生き生きと引き出してくれた。

金属と音体験 2

“どんな音がするかな？コンサート”

10月26日15:00～ 造形スタジオにて



永田砂知子さんと子どもたち

永田砂知子さんは、普段は大人の聴衆を前にパーカッションを演奏する。造形スタジオでは、2歳の子どものもどんな音がするのかと待ち受けている。永田さんは、いつの時も精神を集中させて演奏に臨む。音を感じる者として、大人も子どもも同等に相對する。感じ方や捉え方は違っても、「おと」という直感的な要素を扱うのに隔たりはない。服装は子どもたちが親しみやすいようにと、カラフルな帽子を用意してくれた。回りの環境そのものに気を配ることがすでに音を出す行為につながっている。始まりはしなや

かに、そして途中でリズムが高まっていく。その時、一人の女の子が音を出し始めた。それを見逃さず、永田さんは、その子と共演する。子どもは音を出すおもしろさにひかれて、体そのものも軽やかに動いている。音に誘われた子どもに、別の子どもがひかれていく。個で感じる音の世界は連鎖して共有の宇宙を生み出す。もはや、フライパンからうまれる音だと誰が気づいているだろうか。

それは現実であり、夢のようでもあるのだ。

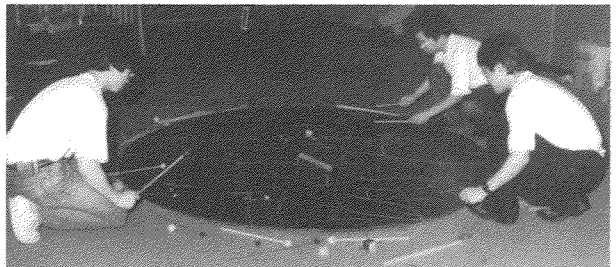
「金属と音」特別展覧会 金沢健一さんの《音のかけら》



1987年「音のオブジェたち展」に展示した《音のかけら》



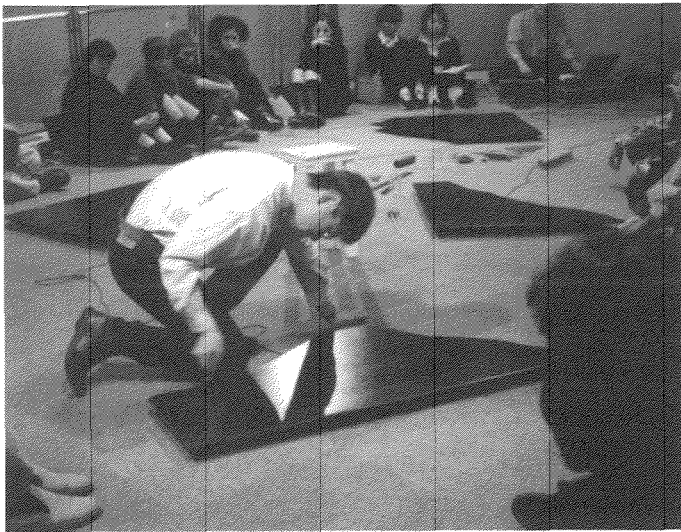
ピロティからはじまった金沢さんのパフォーマンス 1987年



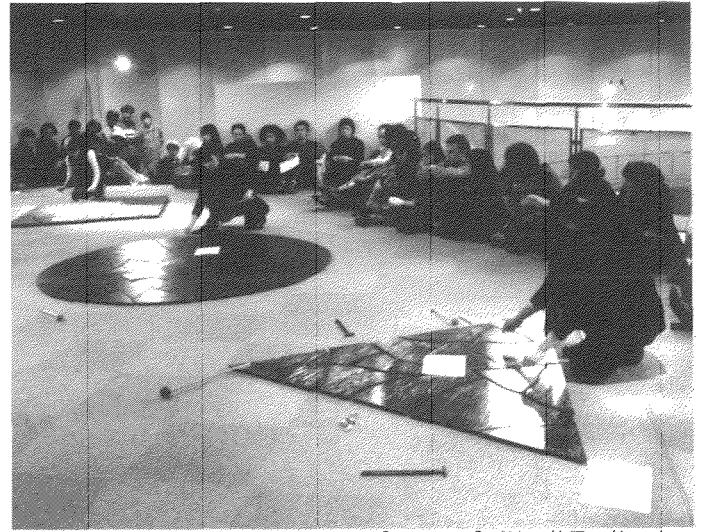
金沢健一さん、岩崎真さん、鶴田睦夫さんによるパフォーマンス
1987年

展覧会“音のかけら”は、1997年「素材との出会い展～金属と造形」の特別版として開催したものである。金沢健一さんとの出会いは、1987年に造形発見展「音と造形」のワークショップの特別展として「音のオブジェたち展」を開催した時にさかのぼる。子どもたちのための一日のパフォーマンスにもかかわらず、2人の作曲家とともに、練習を重ね、高質なパフォーマンスを披露してくれた。そのすばらしさは、今もこどもの城のピロティを通るたびに思い出される。

「音のかけら」とは、金沢さんが数ミリの鉄板と対話しながらイメージによって自在に熔断した鉄の作品である。半球にきったスーパーボールの上に置かれた鉄の破片を木の棒やゴムのマレットでたたくと、はじめて出会う音への驚きと、それにもかかわらず、なつかしさのような感情をも引き起こす余韻が耳にとどいてくる。子どもたちもその不思議な出会いの体験に、マレットが離せなくなる。大きさと形が異なる鉄の破片たちは、時には大らかに時には軽やかに子どもたちを音の磁気へと導いていく。



金沢健一さんのパフォーマンス 1997年10月9日



南聡さん作曲、パーカッショントリオ [The Birds] (神田佳子、佐々木啓恵、長谷川友紀) による演奏 1997年10月24日

1997年「音のかけら」展では
10月24日(19時30分~)に
大人のためのコンサートも開か
れた



永田砂知子さんによる子どもたちのための「音のかけら」の演奏 1997年10月25日

金沢健一プロフィール

1956年東京生まれ

東京芸術大学大学院美術研究科終了

ダンスや演劇の舞台の空間を創造する仕事をするともに、鉄の硬質な素材性をビジュアル化した現代美術作品、鉄が生む音を追求した「音のかけら」の作品など、素材は常に鉄を中心とした金属であるが、さまざまな試みをしている。先頃、よく取り上げられる“コラボレーション”を活動の始めの頃から自然におこなっていたともいえる。

金沢さんが子どものために作品を展示したのは、1987年のこどもの城がはじめてである。その後、北九州市皿倉小学校に作品「音のかけら-かたちをきくことおとをみること」を設置し、永田砂知子さんとともにパフォー

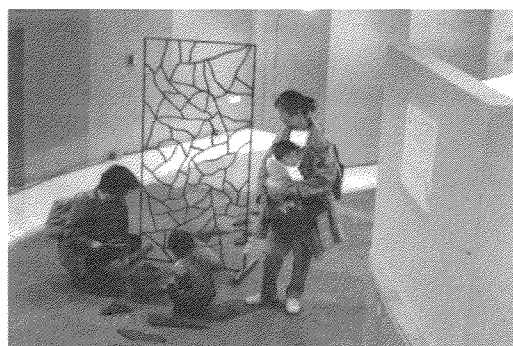
マンスをおこなっている。さらに愛知県児童総合センターで「音のかけら」展を開くなど、万人を魅了する「音のかけら」の本質を表わす活動経緯を踏んでいる。

- 1984 「南極劇場」 新宿文化センター小ホール
- 1985 「南極劇場 PART2」 ストライブハウス美術館
- 1987 「Sound Garden- 音のする美術館」 ストライブハウス美術館
「音のオブジェたち展」 こどもの城
- 1989 「音のある美術」 栃木県立美術館
- 1990 「音づれてみたい美術館」 ストライブハウス美術館
- 1991 「Sound Garden 5- 聴感覚美術館」 ストライブハウス美術館
- 1993 「拡大する鍛金- 三井安蘇夫とその後継者たち」 栃木県美術館
- 1994 「音のかけら- かたちをきくことおとをみること」
北九州市立皿倉小学校
「KARADA がART になるとき [物資になった器官と身体]」
板橋区立美術館
- 1995 「音とかけら- 音と友達になろう」 北九州市立皿倉小学校
- 1997 「音のかけら展」 こどもの城
「音のかけら展 in Aichi」

(金沢健一「音のかけら」カタログから抜粋)

《音のかげら》展 1997年10月8日～10月26日
こどもの城・ギャラリー

《音のかげら展》の入口



パズルの枠のような形に子どもは親しみを感じる



歩きながら、からだ全体で音をつくっていく子どもたち



1997年の「音のかげら」展は、金沢健一さんが「音のかげら」の作品を作り始めて10年を経過した総集編ともいべきものである。2mの正方形と円形の2つの形体で始まった「音のかげら」の作品群は、面積や厚みの大小、鉄の素材に銅を加え、いくつかのバリエーションが増え、増えた分だけ、見る者に音の探索範囲を広めるように投げかける。一つの破片をたたいてみる。次にとなりをたたいてみる。素材が音を呼び、音が素材に返る。

今回の「音のかげら」展では、入口の階段に島が

無数に点在するかのようになり、鉄の破片が置かれている。子どもたちは踏んでいいものか、触っていいものか、その存在が示す視覚的範囲以外のものを直観しようとするが、なかなか次に踏み出せない。そこで、マレットを差し出し、一叩きして、それがどんな可能性をもったものかを垣間見せる。すでに、子どもたちの表情には笑みが浮かんでいる。鉄という素材とそこから作られた形から受ける印象、あるいは体験から予測しようとしたものとは全く違う現象に顔がほころぶ。鉄の島は子どもたちによって音に繋がれた

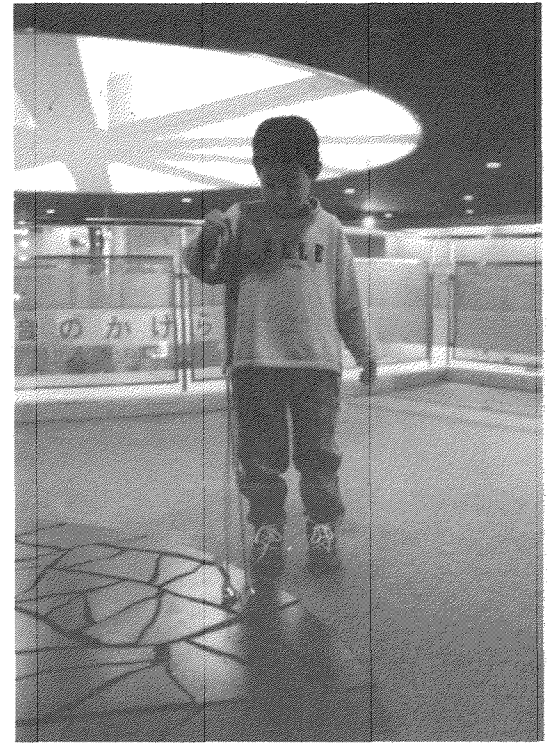
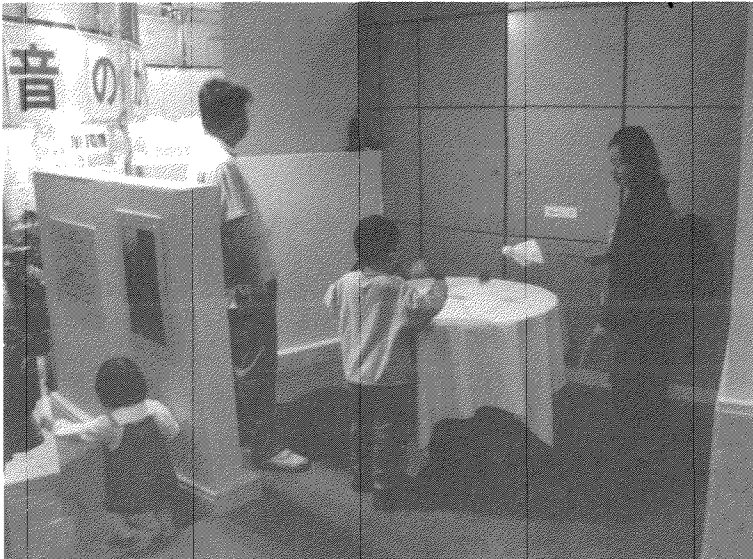


「音のかげら」



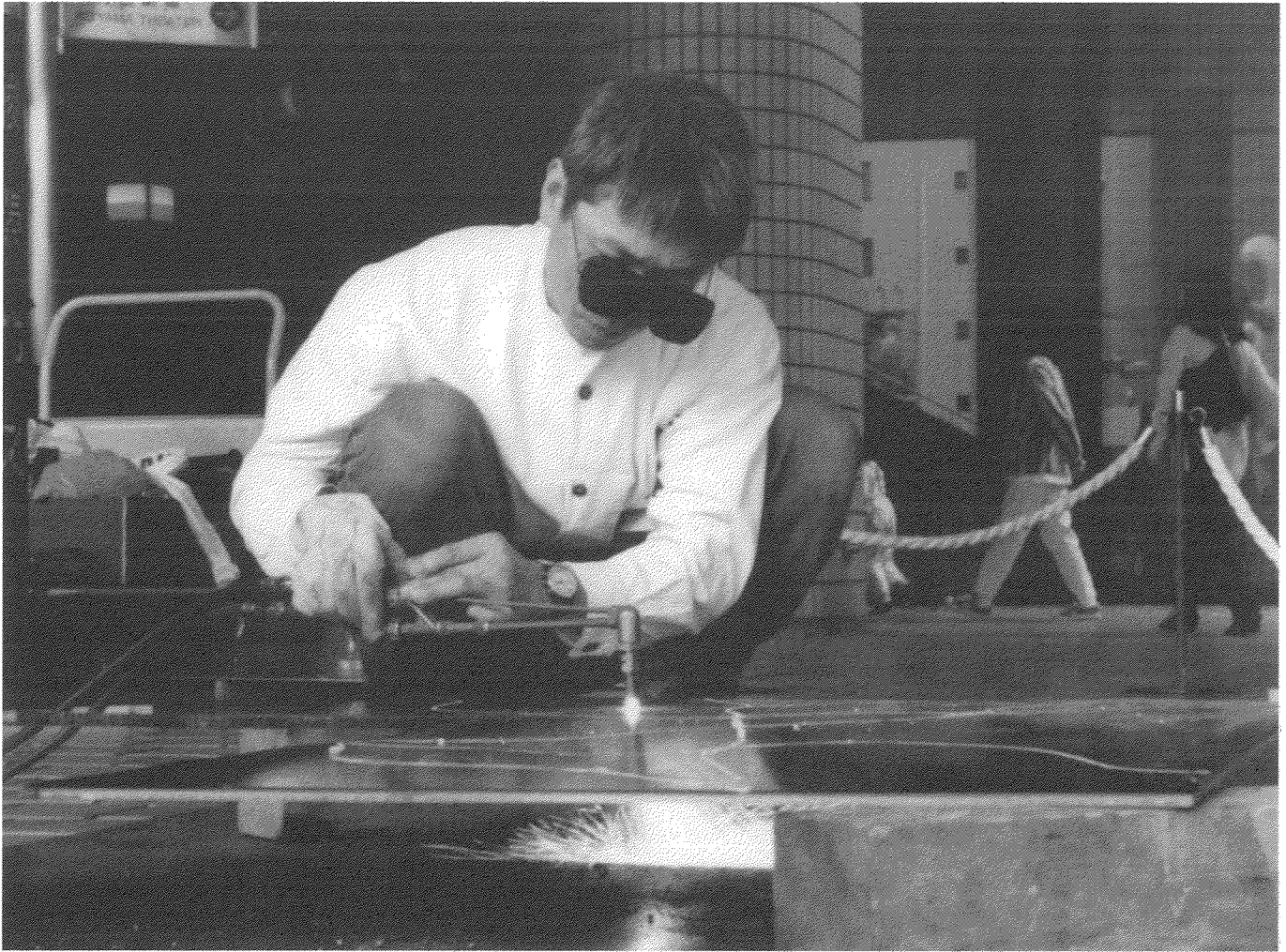
同じ面積で異なった形の「形の音階」

「記憶のためのテーブル」テーブルクロスに隠れた《音のかげら》



列島となる。列島の途中には、子どもたちが紙を切り抜いたパズルの台紙のように、くりぬかれた後の形が直立している。一枚の鉄の板から、形が選ばれ、熔断され、並べられたのだ。子どもたちは展示の中で、金沢さんの鉄に対する行為を視覚体験しながら、次の島へと移り渡る。2階の比較的広い空間では、大きい「音のかげら」に出くわす。金属の破片が、基の大きい形体である丸、正方形、正三角形に組み合わされている。それぞれは鉄でありながら、厚さと表面の質（黒皮、錆、磨き）を変えている。

それらの違いは、音の質をも変える。マレットに加えて、鎖や、木のボール、ピンポン玉、太目のボルトで、たたいたり、やさしく転がしたり、こすったり、行為と音が一体化する。次の空間に進むと、「音のかげら」の元々の要素が視覚化されて比較できる。同じ厚み、同じ面積の10枚の鉄の板に限りなく求められた亀裂が、音の違いを暗示する。最後はコンピューターのランダムな自動装置によって鉄板に振動がもたらされる作品で、テクノロジーがもたらす音源が子どもの手と体に伝わる。



親子が引いた線にそって、熔断する金沢健一さん こどもの城ピロティにて

親子ワークショップは、それぞれの親子がグループになって金沢健一さんと《音のかけら》を作る活動である。会場は、10年前に金沢さんたちがパフォーマンスを仕掛けた外のピロティである。親子で、鉄板に《音のかけら》にするための線を描き、金沢健一さんがみんなの目の前で、それを熔断する。91センチ×91センチ（厚み9ミリ）の鉄板を造形素材とする体験はなかなかない。子どもばかりでなく、大人もある種の興奮を覚える。他の素材と異なり、鉄が自在に加工できないことを多くの人知っているからであろう。ま

た、熔断するために火を使うことも、人々の気持ちを高揚させる。5組すべての鉄板を数時間で切るエネルギーは並大抵のものではない。手と腕と目を総合的に動かしながら、線に添って集中させて仕事をすすめる金沢さんの真摯な態度は、親子に、自らが鉄板に線を引くという貴重な行為以上の強い印象を残したに違いない。

次には、金沢さんによって熔断された「音のかけら」を、自分たちの手で打ち鳴らそうという試みが待っている。渡辺亮さんの体全体を使った指揮の元にピロティは鉄の音の渦となる。ギャラリーに展示されている金沢さ



金沢さんから線をひく
アドバイスを受けているところ



網で熔断するための
線を描いている



金沢さんが熔断して
いるところを見守る
親子



熔断された鉄のかけら
を組み合わせている親子



金沢さんと一緒に生
み出した鉄のかけら
で演奏している参加者



渡辺亮さんの指揮に
よる《音のかけら》大
演奏会

んの「音のかけら」が個々の音色（おんしょく）に耳を傾けられ、大切にまもられているのに対し、こちらの音は、生まれたばかりの赤ちゃんの泣き声のように元気よく凄まじい。

「音」とはこのようにさまざまな顔をもつ。どのような顔を見せるかは、いざなう私たちの手とからだと心によって決まってくる。

展示場での永田砂知子さんによる子どものための演奏は、金沢さんの鉄への思いと重なり合い、音と間合いと動きにゆるやかなバランスを空中に泳がせていた。

金沢さんが展示会場でなにげなく《音のかけら》をたたいている時、そこには、金沢さんのアトリエの香と響きが運ばれている。金沢さんはそれぞれのかけらと、手の振動による対話をどれだけ多く積んできたことだろう。『制作中にふとアトリエで音を出しはじめると止まらなくなるんです。ずっとたたいてられるんだ。』という金沢さんは、《音のかけら》とともに新しい音に出会う旅をしているのかもしれない。それとも、瞬時に生まれる音の連続は、未来に向かう人間の生への流れに共鳴している模索音なのだろうか。

